

森永タウンの夢

近年までJR塚口駅東側には広大な森永製菓塚口工場があったのは、よく知られるところです。塚口工場は、関東の鶴見工場とともに森永製菓の屋台骨というべき主力工場でした。森永製菓は大正5年創業。大規模工場の建設計画にあたっては、福知山線塚口駅東に隣接する上坂部の農地を買収することにしました、大正7年に用地買収に取り組み、土地所有者を1軒1軒訪問しました。上坂部の農家は、用地買収後工場建設までの間、稲を作らせてもらい小作料を払っていました。工場はチョコレート、キャラメル、ビスケットを生産し、最盛期には従業員1,200名を擁しました。ことチョコレート、キャラメルに関しては、我が国最大の製造施設を有していました。以下は、森永製菓のサイト「ビスケット物語」Vol. 2からです。

「1920年（大正9年）、4月、とうとう、本格的に国内でビスケットを製造販売するために、新工場『塚口工場』の建設に着手したのです。工場建設用地には、8万5千坪（東京ドーム約6個分）という、当時ではケタ違いに広い敷地が用意されました。なぜならそこには、生産環境や福利厚生施設などの点でも欧米にひけをとらない、『働く人の理想郷・森永タウン』が作りたい。という、太一郎の壮大な夢が込められていたからです。

【働く人の理想郷・森永タウン】

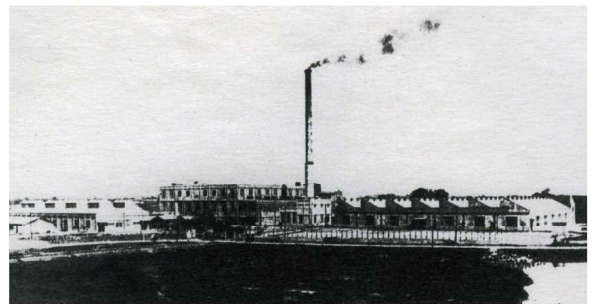
- ・欧米の製菓会社に匹敵する、近代的生産設備。
- ・製糖、製粉、製飴工場を併設し、製菓工場に直結して一貫作業が行える製造環境。
- ・従業員の住宅を始め、運動場、病院、学校などの厚生施設の完備。

翌1921年（大正10年）、3月、国内はもとより、東洋のどの国にも見られなかった、鉄筋コンクリート3階建ての近代的なビスケット工場『塚口工場』が完成しました。

そこには、英国から調達した最新式の高スループット7台をはじめとして、最新式のビスケット製造設備が据えつけられたのです。そして、翌1922年（大正11年）、1月1日、英国のビスケット技師アッセル父子を雇い入れ、英国から取り寄せた原料を使い、経験豊かな彼らの指導により本格的なビスケット製造技術を習得したのです。しかしヨーロッパ風ビスケットの味は、当時の日本人の嗜好には受け入れられにくく、納得できるものになるまで研究を重ねました。」



グラニュー糖搬入



塚口工場（2期工事完了後）



塚口工場とビスケットの焼き上げ工程（上坂部小学校社会科資料室蔵）

原料混合から成型、焼き上げまでの一貫製造工程を全自動で行う。全長70メートルにも及ぶスチールバンドオープン

解体工事中の塚口工場 2014年



「塚口工場（2期工事完了後）」および「解体工事」 写真提供 尼崎市立地域研究史料館